隠岐国駅鈴・隠伎倉印 重要文化財指定九十周年記念

隠岐の国歴史文化講座

江戸時代に描かれた駅鈴(えきれい) 写された駅鈴図

2025年
11月23日(日)
午後1時30分～

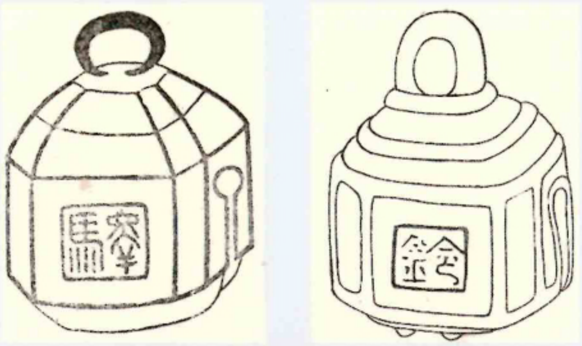
隠岐島文化会館
入場無料・申込不要

講師
野々村(ののむら) 安浩(やすひろ) さん
元島根県古代文化センター特任研究員

江戸時代、玉若酢命神社宮司の億岐幸生が隠岐から駅鈴を携えて上京すると、京都を中心に文化人の間でとても話題となりました。

この古代の律令制国家を象徴する駅鈴の存在は、宮廷の儀式や神事の復古を進めていた光格天皇の改革の大きな後押しとなりました。その後も駅鈴を描いた図や複製品、詩歌などの文学作品が数多く作られると、さらに全国に知れ渡り駅鈴ブームが起こりました。

今回は、様々な駅鈴の図やその成立の背景を見ながら、当時の駅鈴をとりまく歴史にせまります。



隠岐国(左)と讃岐国(右)の駅鈴図
(松平定信編『集古十種』(寛政年間頃) 銅器の部より引用)

主催 隠岐の島町歴史文化交流推進協議会
後援 隠岐の島町教育委員会 隠岐の島町中央公民館

「駅鈴」を通した地域交流が進んでいます

～隠岐の島町・浜田市・三重県松阪市～

「隠岐国駅鈴」は、８世紀頃に大和朝廷によって隠岐へもたらされたものとされています。現代に残る国内唯一の駅鈴とされ、国の重要文化財に指定されています。

千年後の江戸時代、駅鈴はすでに本来の役割を終えて眠りについていましたが、玉若酢命神社宮司の億岐幸生によって京へ運ばれ、儒学者西依成斎ら都の文化人や公家に見いだされました。そして光格天皇により御所再建の行列に召し出されるなど、一躍有名になりました。

この行列を見た松阪出身の国学者本居宣長は、駅鈴にも興味を示していて、学問を教えた浜田藩主松平康定から駅鈴の複製品を贈られ、とても喜びました。

それから２００年後の令和３年、この歴史上のできごとをご縁に隠岐の島町、浜田市、三重県松阪市の地域交流が始まりました。